

薬用植物の利用と〈自然観〉について

—北部ベトナム・サパ県におけるザオ社会を事例に—

井 関 和 代

‘The View of Nature’ of the Zao People in Sa Pa District, Northern Vietnam, as Reflected in Their Use of Medicinal Plants

Summary

This paper studies the ‘connection with nature’ of the Zao people in Northern Vietnam, based on an investigation of their use of medicinal and dye plants that was conducted for three weeks starting in early August, 2001. This study is part of the research on textile technology of the northern mountain’s ethnic minorities in the Socialist Republic of Vietnam that the author has been continuously investigating since 1995. Vietnam is located in the tropical zone. And it is divided into tropical monsoon and savanna climates.

Because of its high altitudes and heavy rainfall, however, the northern mountain area contains a rainforest zone with many deciduous trees. However, Sa Pa District, the area of investigation in this paper which is located in that mountain area, has a moderate climate and vegetation similar to that in Japan. This paper studies the view of nature of the Zao people who are living in that natural environment as reflected in their use of medicinal plants.

はじめに

筆者はベトナム the Socialist Republic of Vietnam の北部山岳少数民族の染織技術誌的調査を1995年から現在まで継続して行っている。その調査資料のなかから、本稿では2001年8月下旬から3週間、北部ベトナム・ラオカイ Lao Cai 省サパ Sa Pa 県のザオ Zao 社会で行った薬用・染料植物の利用に関する調査をベースに、彼らの「自然との関わり方」について、論考を行うものである。

さて、ベトナムは熱帯地帯に位置し、熱帯モンスーン気候とサバナ気候に分かれる。しかし、北部山岳地帯は高い標高と多雨のために落葉樹の多い雨緑林地帯となり、中で

も、調査地・サパ県は日本の風土に似た温かな気候や植生を示す。本稿では、このような自然環境の中で生活する人びとの「自然観」を探ってゆくことにしたい。

第1節

1-1. 調査対象地と先行研究

ヒトとそれを取り巻く生態環境について、ある特定の民族集団の居住地の地形や植生などの環境条件から、その民族集団の自然観を探ることができないか、と考えた筆者

は、北部ベトナム山岳部での少数民族集団の染織技術調査を実施する中で、以下のような視点を持って、調査地を探すことにした。

まず、ヒトと自然の付き合い方を顕著に観察でき、次に、生活環境と自然環境の中で多岐な植物利用が観察できる民族集団であること、さらに、ヒトの活動によって植生に変化が起きている地域であること、と三つの条件を設定した。そして、染織調査で訪れる幾つかの民族集団の生活行動や周辺の植物環境に留意し続けた結果、先述した条件に合う民族集団としてサパ県タフィン Ta Phin 村(社)に居住するザオの集落に注目し、2001年に調査を実施した。さらに2004年3月、2010年3月と、今なお、継続して調査を行っている。

さて、周知のように仏領下から1945年のインドシナ戦争の勃発、続くベトナム戦争の終焉(1975年)までの間、この国に関する民族誌的調査は皆無に等しく、古い先行研究の多くは仏領植民地時代にヨーロッパ、とくに仏人の研究者によって著された資料⁽¹⁾をベースにして、その認識がなされてきた。

このようなヨーロッパ人による先行研究を詳細にまとめたものに『ベトナムの少数民族』[菊地 1988]がある。また、中国やインドシナ半島の内陸部に居住する少数民族については、タイ Kingdom of Thai-land の山地民族とくにザオの民族誌に焦点をあてた白鳥芳郎編『東南アジア山地民族誌』[白鳥 1978]や中国南部に住む少数民族の儀礼を検証した竹村卓二編『儀礼・民族・境界・華南諸民族「漢化」の諸相』[竹村 1994]、『ヤオ族の歴史と文化』[竹村 1981]、『The Yao』[POURRET 2002]などを挙げるができる。

1-2. 研究目的

これまでのヒトと植物との生態学的な研究には、環境生態学的観点からヒトの生活から生じる環境汚染や自然破壊の問題などについての研究が多い。

筆者はもとより、生態学を専攻する者ではなく、染織学を学ぶ者である。しかし、数回の北部ベトナムでの染織調査において、その素材となる植物採集の都度に、観察する生態環境やその変化に留意するようになった。

そこで、本稿では、植物をめぐるザオ社会の居住環境や、薬草・染料植物の利用を通じて、「その地域における生態環境とヒトとの関わり合い」といった視点から、彼らの「自然観」を考察することにした。

尚、調査は英語で行った。また、本文中に記述する現地語は調査対象としたタフィン村のザオ語とする。

第2節 北部ベトナム・サパ県とザオの人びとについて

2-1. 北部ベトナムの自然^(地図1)

2-1-1. 北部山岳部の地形

北部ベトナムを流れる紅河 Song Hong は、中国・雲南省のタライ湖を源流に、北部のラオカイからイエンバイ Yen Bai、ハノイ Hanoi を経て、トンキン湾 Gulf of Tong King に注ぎ込む全長 1,149m の大河である。

北部ベトナムの地形は、この大河を中心に左岸の東部と右岸の西部とに分けられる。

紅河の左岸は石灰質の山脈や、花崗岩で山塊状に形成される円丘が点在し、紅河の右岸は二つの山地が形成されている。また、紅河の南を平行するようにして流れる黒河 Song Ma は、ソングラ Son La の山間部を源流とする。この二つの河川の間には北部ベトナム山岳地帯で最も険しい山塊があり、サパ県北部にはベトナム最高峰ファンシパン Mt. Fan Si Pan (3,142m) がある。

2-1-2. 北部山岳部の河川と盆地

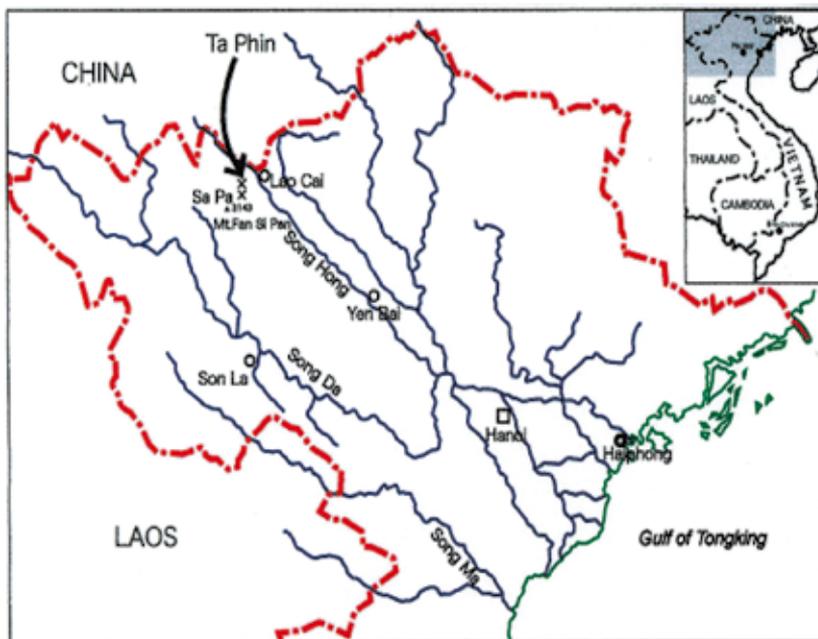
紅河はその名称の由来に、この地帯の土壌であるラテライト層から流れ出る土砂で赤色を帯びていることにある。上流の雲南省・曼耗から中流域のベトナム・イエンバイにかけては、水量の豊かな急流となっている。そして、山岳部の北東では紅河の支流、ソングカウ Song Cau 川やソングオン Song Thuong 川、タイビン Thai Binh 川など、多くがある。また、紅河は他の東南アジアの河川とは異なり、中流域に平原がなく山岳部から直接、平野へと流れ出る。その山岳部や中

流域の所々の小盆地に町や村が発達している。

サパ県でも石灰岩質の山から湧きでる水が集まり、小さな流れでできた谷川が多数あり、それらの小盆地や小台地に集落が形成されている。

2-1-3. 北部の気候(表1)

北部ベトナムは北緯20-23.4度に位置する熱帯モンスーン地域である。そのため、雨期と乾期がある。そのうち南西モンスーン季(5月-10月)には大陸の低気圧の影響から、年間降水量80%以上がこの時期に集中している。とくにこの季節の後半となる8,9月に降水量が多く、月降水量



地図1 北部ベトナムの水系と調査地タフィン(作図 井関高平)

	標高		1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	平均気温	年降水量
ハノイ Hanoi	5	気温	16.6	17.0	19.9	23.7	27.3	28.8	28.9	28.3	27.3	24.6	21.4	18.3	23.5	1,674
		降水量	19	27	46	88	191	240	286	314	258	135	53	18		
イェンバイ Yen Bai	56	気温	15.3	16.5	19.9	23.3	26.7	27.8	28.0	27.5	26.4	23.9	20.4	17.0	22.7	2,107
		降水量	11	25	42	103	173	263	295	271	153	44	29	10		
ラオカイ Lao Cai	99	気温	16.0	16.8	20.6	24.0	26.8	27.6	27.7	27.3	16.3	23.8	20.2	17.3	22.9	1,764
		降水量	147	65	90	208	330	341	391	405	316	112	16	39		
サパ SaPa	1570	気温	8.5	9.9	13.9	17.0	18.3	19.6	19.8	19.5	18.1	15.6	12.4	9.5	15.2	2,833
		降水量	147	65	90	208	330	341	391	405	316	112	16	39		

表1 北部ベトナムの気温と降水量
(Hanoi, Son La: 『ベトナムを知る事典』参照 Sa Pa: 2003年度サパ気象観測所調)

月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
平均気温	7.7	12.6	13.5	18.0	19.4	19.4	20.1	19.6	17.6	15.9	13.0	8.8
最高気温	19.0	22.8	24.1	27.8	28.2	25.9	27.5	27.3	25.2	25.1	22.0	18.2
最低気温	0.0	3.8	3.4	9.8	11.7	14.7	15.9	16.1	11.9	11.1	6.5	3.5
平均湿度	91	79	81	77	84	88	87	88	91	94	88	94
最高湿度	100	100	100	100	99	100	100	100	100	100	100	100
最低湿度	32	26	28	30	35	59	54	54	56	64	47	44
降雨量	146.5	65.4	90.4	208.3	330.2	340.6	390.6	404.7	315.8	111.9	15.1	39.1
晴天時間	82	178	130	196	165	95	153	129	128	67	158	62

表2 サパの各月の気候(参照:サパ気象観測所調2003)

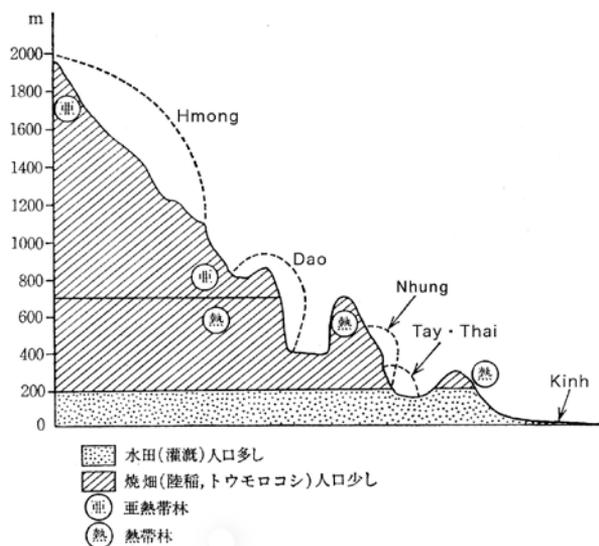
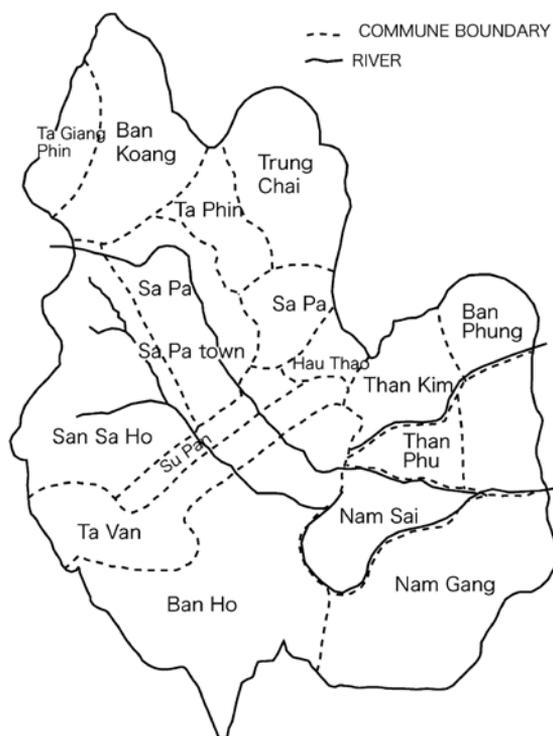


図1 北部ベトナム・民族集団の垂直分布
(J.Sion, Geographie universelle, IVより引用)



地図2 サパ県の行政区分と河川

は300mm前後となる。また、7,8月を中心として台風の襲来も多く、南西モンスーンに多量の湿気が含まれ、湿度が高くなる。そして、北東モンスーン季(10月-1月)は降水量の少ない乾期にあたる。このような熱帯気候の北部ベトナムにあって、標高の上がるに従い気温が下がり、温帯性気候となる。

2-1-4. 北部の植生

北部地方は熱帯気候から温帯気候とが混在し、標高0-700mの地帯では、標高が上がるにつれて「種の多様性」が乏しくなる。また、植生の豊かな場所では蔓性植物は少なく、広葉常緑樹が多い。ハノイからサパまでの道中、イェンバイやブトーPhu Thoなどの低地の各省では、タケ連(Bambuseae)に多くの種を確認した。

標高700-1,500mでは、この地域の緯度にも関わらず、次第に気温が下がり、ブナ科のカシワ(*Quercus dentata*)やクリ(*Castanea crenata*)などの落葉樹が多くなる。

また標高1,500m近くになるとスギ科(Taxodiaceae)などの針葉樹も所々の疎林や雑木林に混在するようになり、草花は多種咲き乱れる。中でも多種のキンポウゲ科(Ranunculaceae)、とくにシュウメイギク(*Anemone hupehensis*)の花やノボタン科のノボタン(*melastoma malabathricum*)の花などが目につくようになる。ここでは多くの少数民族集団が古くから焼畑農業を行い、その耕作面積は350万haにも及んでいるとされる[菊地 1988: 52]。

また、1,500m以上の地域は原生林となるが、この耕作の限界となる標高まで農耕を行っているのが調査対象となったザオヤフモンなどの少数民族である。中国の少数民族の調査報告[田畑他 1995: 114-115]などと同様に、北部ベトナムでも標高によって民族集団の住み分けが見られる。(図1)

2-2. サパ県の気候・自然・風土的条件

調査の基地となったサパは、「砂の町」という意味を持ち、北西部ベトナムのラオカイ省(旧ホンリエンソンHon Lien Son

省)・サパ県の中心地として人口が密集する。海拔1,650mに位置するこの町の背景には山岳の美しい景観が広がる。この地をイエズス会宣教師が1918年に見出し、その後、フランスの植民開拓者が1932年に避暑・静養地として開発を始め、かつては「Tonkin Alps」⁽²⁾呼んでいた。

そして、1945年以降になると、ベトナムはフランスから独立して新政府を樹立したが、フランス軍はこれを認めずに1946年に北部に進攻し、1954年の撤退までサパはその支配下にあった。また、1979年の中越戦争ではサパの町も惨禍に見舞われたが、1980年以後復興し、北部山岳地帯の観光の基地となっている。(2010年現在では、その観光開発は劇的と表現できるほどに進展している)

2-2-1. サパ県の気候(表2)

サパ県の緯度は北緯23.2度である。しかし、標高約1,500mに位置するために温暖な気候を呈し、年平均気温は15.4℃で2003年度(サパ気象観測所調)では最高気温が7月に29.4℃、最低気温が12月に-3.2℃を記録した。また、12月から2月が最も寒く霜が降り、雪も年に1-3回降る。さらに、霧の出る日が年平均137日もあり、ファンシバン山塊やサパの町を覆う。湿度の年平均は87%である。

2-2-2. サパ県の自然と植生

ファンシバン山とその山塊周辺の標高は2,800m以上となり、西側に面した山々の斜面では、常に強風が吹き植物の発育が妨げられ、低い植物が多く生育する。また、痩せた土壌が要因となり、ササ(*Arundina pumilia*)類や、シャクナゲ(*Rhododendron*)などの低木のみが生育する。

2,800-2,500mの地帯は、入り組んだ凹凸のある独特な山岳地帯となり、常に霧に包まれ、現地の人びとから妖精の森と呼ばれている。この地帯の地面はコケに覆われ、その表層部にツガ(*Tsuga yunnanaris*)や地衣植物、着生ラン科(*Orchidaceae*)などの種を多く見る。(写真1)

2,500-1,500mの地帯でも植生は標高に影響され、標高が低くなるに従い、樹木の種類が多くなり、その樹高も高く

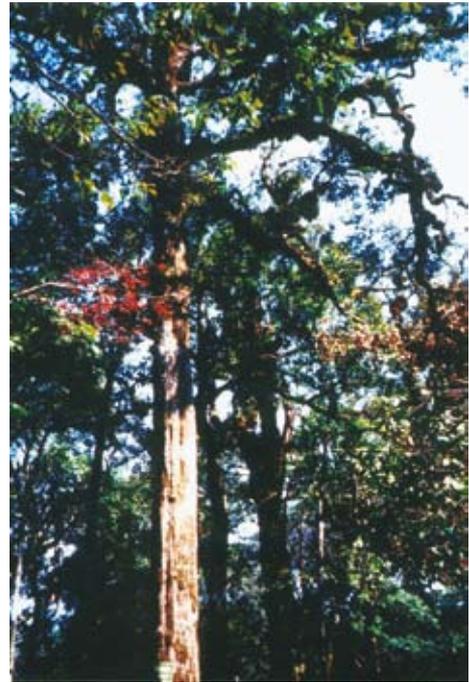


写真1 ファンシバン山麓
標高2,000m附近の植生

なってくる。これらの地域は耕作地として人が踏み入らない場所であるために、人為的な自然への攪乱は小さい。しかし、標高が低くなると耕作条件の良い斜面の所々で、少数民族の畑を見ることができる。

1,500m以下の地帯は、前節で触れたようにかつては高木の常緑樹や落葉樹の森林地帯であった。その様相は2,000-1,500mの豊かな森林の様相からも容易に想像がつく。そして、約200年前にフモンの人びとが入植するまでは、この地域に住む人びとの諸活動は自然の植生とそのサイクルと共にあったという。

しかし、焼畑農耕に長けたフモンの農耕活動によって、原生林の多くが二次林、三次林となっていった。これを危惧したフランス政府が少数民族に山岳部での水稲耕作を奨励した。また1962年以降になるとベトナム政府の少数民族定住化政策の推進によって、彼らは定住した土地での過度な焼畑耕作を行うようになり、その結果、森林部の多くが畑



写真2 春の焼畑作業
標高1,500m前後の峻嶒な山々も、年々、拓かれて耕作地となる。



写真3 タフィン村の原生林。
耕作地化をまぬがれた標高1,300mの森林部には多種の広葉樹や常緑樹、草木の植生がみられる。

や棚田となった。そのため、山を覆っていた森林は大幅に減って断片化され、今日ではファンシパン山麓の保護区に指定された約 12 km²の原生林が手付かずの形で残されているに過ぎない。

山腹にある台地に位置するサパ町から周辺を見渡すと、遠く山々が連なり、緑の多い奥深い山中にザオやフモンなどの少数民族の集落が点在すると、いったイメージが湧く。しかし、実際に村々に足を運んでみると、彼らの居住する集落は山中に位置しているが、山頂部や深い谷に僅かに原生林を残して田畑が連なり、その光景は開かれた土地といった印象を受ける。(写真2)

これに加えて、山岳部の樹相もこの明るさの要因となる。既に述べてきたように、サバ県は標高1,500m前後のために、照葉樹や落葉樹のカバ科 (*Betulaceae*) やブナ科 (*Fagaceae*) が多い植物相となる。また、1年を通じて雨と霧の日が多く、高湿度のために山地にも関わらず水量が豊富にあり、草花の多種を見ることができる。(写真3)

2-2-3. サバ県の土壌

サバ県の南部のホアホ Hoa Ho 川からファンシパンを含む峰々は、中生代の起源とする花崗岩土壌である。花崗岩にはカオリン ($\text{Al}_2\text{Si}_2\text{O}_5(\text{OH})_4$) が多く含まれ、かつては陶土の

原料に用いられていた⁽³⁾。一方、西部の山塊では大理石の岩が露出し、石灰石 (CaCO_3) の採掘もおこなわれている。

また、筆者の調査したザオ社会でも、かつて藍染用の助剤に石灰岩を自家用に焼成して石灰 *bet voi* を得ていた。

2-3. 調査地に住む民族集団

2-3-1. サバ県の少数民族

サバ県の人口は31,652人とされ、住民の内訳は、フモンが52%、ザオが25%、タイ Tay が5%、ザイ Giay が2%となり少数民族が主流を占め、ベトナムの主要民族集団であるキンの人びとが15%で、主にサパの町に居住している。これら少数民族集団と主要民族集団・キンとは法律、政治的には同等な条件⁽⁴⁾で生活し、各省は地方政府の自治体と郡行政とに分けられ、自治体は長を選出し自治的な事項を決めている[STUBBLEFIELD 2001]。

2-3-2. 民族集団ザオについて

ベトナムではザオの人びとを Yao, Dao, Zao, Mien, Iu Mien, Man、中国では瑶と表記される。ザオは言語学的分類ではオーストロ=アジア語系に属し、Hmong = Zao 語族系に分類される民族集団である⁽⁵⁾。ザオの人びとは、中国広西壮族自治区を中心に中国南部⁽⁶⁾から大陸東南アジアの

山地部に居住する。古くは長江中流域の四川省や湖北省あたりにいたといわれるが、13世紀頃から徐々に南へ移動し、ベトナム北部にかけては15-20世紀に、過山系ザオの人びとが雲南省と広西省から、移動してきた。

「主に移動を伴う焼畑耕作を営み、陸稲、トウモロコシ、イモ類などを栽培する。その他、換金作物は地域により異なるが、薬用植物、茶、油桐、綿花、キノコ、藍、ケシなどの栽培で知られる。定着化したザオは棚田で水稲耕作を営む。(中略) さらに多数のサブグループに分かれるが、大別すると移動性が強く、インドシナタイにまで至った過山系ザオと定着的な非過山系ザオがある」[吉野 1987:785]

ベトナムに居住する54の民族集団のうち、ザオは人口約47万人で8番目の人口率を占める。彼らの多くは北部ベトナム・中国との国境沿いのラオカイ、カオバンCao Bang、ランソンLang Song、バクタイBac Thai、ハザンHa Gian、トゥヤンゲアンTuyen Quang、ゲアンニンQuang Ninh、ソンラSon La、といったベトナム北部の省に居住する過山系である。しかし、その移動時期や居住地域などからさらにサブグループ⁽⁷⁾に分けられる。

サパ県に点在して居住するザオは、女性の赤い頭巾に因んで、赤ザオZao Doと通称される。自称ではミエンMienという。

2-3-3. タフィン村とザオの人びと

調査地・タフィン村は、サパから北に約5.3km、ラオカイに繋がる主幹道路を車で10分程下った所から間道に入り、1999年に開通した道路をさらに10分下った距離にある。

標高1,200-1,300mの傾斜の緩やかな扇状地に位置する村の入り口は、大きな大理石が地面を覆う広場となり、これより村へは農道となり、自動車の通行ができない。そこから北西に約500m離れた位置に小学校がある。(2001年の調査時には、この広場周辺に公安施設や観光客を対象としたUNICEFの作業所や飲み物等を売る小さな店が数軒あるだけであった⁽⁸⁾。しかし、2010年時には、商店が数十軒立ち並ぶまでになり、ザオ領域となる目印であった大理

石床もその商店街で覆われた状態となった)

村の人口(2001年時)は約2,000人で、人口比はフモンが65%、ザオが35%であり、村を二つに住み分けている。

聞き取り調査によるタフィン・ザオの移動史では、「始め中国の広東省に住んでいたが約800年前頃に広西省に移動を始め、さらに雲南省を経て紅河を下り、ラオカイを經由してベトナムに入り、紅河の支流の一つであるンゴイドムNgoni Dum川沿いに、コッサンCoc San、そして、モンセンMongXen川域のチュンチャイChung Sai(中塞)に定住したが、祖先が対岸に明るく開けた広野を見つけ、グループの一部がその地に移住し、土地の様相を意味する<台平>と名付け、村を開いた。そして、後に、フモンの人びとがやってきた」という。

そして、フモンの人びとは野の一角に集落を築き、ザオの人びとが野を見下ろす山の斜面や盆地にある小高い台地状の斜面に、各戸が分散して点在している。

さて、過山系ザオは「古代始祖伝説」である「槃瓢伝説」を偲ばせる犬が描かれた「評皇券牒=過山譜yem」を所蔵しているとされ、タフィンの祖村であるチュンチャイにはそれが伝えられているが、分村のタフィンには、開村に関わった李Ly家などの旧家系に、祖先dia phaiの名を記した家譜



写真4 評皇券牒

中国・インドシナ半島の山々を移動したザオの通行証でもあった「過山譜=評皇券牒」の開帖部分に、彼らの始祖伝説の犬「槃瓢」が描かれている。(於ハノイ)



写真5 「通書」

旧家の各戸に伝承され、彼らの通過儀礼の手引書として今日でも使用されている。(於タフィン)



写真6 度戒儀礼

命名や結婚儀礼などの通過儀礼の後、ザオ社会の成員として認められた者は、さらにザオ道教の司祭者の階位授与儀礼を受ける。(於チュンチャイ)

「家先単 *ban vuong*」のみが伝えられる。また、彼らの風習は漢族文化、とくに道教の影響が強く、「通書 *thong su*」と呼ばれる漢字で記された道教⁽⁹⁾に基づく儀礼書が旧家に伝わる。また、二世前までの多くの人びとは広東語を話し、他の少数民族との共通語としていた。

彼らは現在でも中国の旧暦と同じザオ暦 *han ly* に基づいて行動し、道教司祭 *phiu yeng mien* のもとに、先祖 *dia phai*・鬼神 *khiem mien*, *chan tai* 崇拜を伝承し、様々な通過儀礼(誕生 *thinh mien khu*, 成人 *chauxe*, 命名 *qua tang*, 結婚 *hap tin*, 葬儀 *ta chay*⁽¹⁰⁾)を執り行なっている。(写真6)

例えば、男児の通過儀礼では、誕生儀礼で幼名を付け、嫁を迎えるまでに命名儀礼によって正式な名を与えられると共に、ザオ社会で成員として認められ、各戸に伝承される「家先単」に名を「漢字」で書き加えられる。また、成員となった男性は漢衣装に影響を受けた藍染めの短衣と上着の背中に長方形の刺繍をした布片を付け、ズボン、ターバンを身に付ける。

男性が命名儀礼後に村社会の成員となるように、女性は10-13歳を迎えると前髪の毛を剃る儀式 *ma lay* が行なわれ、赤い頭巾を身に付ける。そして、結婚⁽¹¹⁾した女性は眉を剃

り落とす。女性の頭巾は、銀貨と赤い紐で装飾された赤い四角の布で、これを折って三角形にして被る。前述したように、この赤い頭巾と女性の長衣の襟に房状に付けた赤く染めた飾り糸(かつては羽根)から、赤ザオと通称されてきた。そして、刺繍の入ったズボンを穿き、長衣に腰帯を巻く。一見すると長衣の裾がエプロンのように見えるのが特徴である。また、少女たちはこの上に刺繍されたベストの様な被布を身に着ける。そして、男女ともに銀の装身具を身に付け、肩掛けの赤い紐の付いたバッグを持つ。(写真7)

第3節 タフィン村の自然・生活環境

3-1. 自然

前述したように、タフィンは盆地 *deng choons* に開かれた村であるが、ここでも明るい印象を受ける要因は、他地域と同様にザオと共に居住するフモンの田畑にある。また山側に位置するザオの集落へと続く道は水田の間に延びる少し大きな畦道状であり、山間部では一本道となって尾根筋に延び、山頂を目指している。そのために彼らの住居は森の中にはあるが、常に開かれた光景となる。また、村人たち

はラオカイや隣接するサバなどの町への商業活動や遠くの田畑に耕作に出かけるなど、閉ざされた秘境のイメージとは全く異なる行動範囲から、彼らの生活にも明るさを感じる。

タフィン村のザオの集落は環境学的にいうとロードサイド型と散村型をとり、村を貫く形で走る道沿いの斜面に住居 *pieu* が建てられている。そして本街道にあたる道から住居や田畑へと続く小径が分岐する。しかし、それらの小径は道として整備されたものではなく、踏み固められただけの足場も安定しない状態である。

ザオは住居の背面を急な山の斜面とすることを好むために、沿道にある住居はここ数年の間に建てられたものが多い。

小径の周辺は崖になった藪地か耕地となっている。また、耕地として利用されていない森林も燃料用に伐採されるために大木は少なく、明るい印象を受ける。そのため、全く日光が当たらず、見捨てられたような窪地の方がむしろ多種類の植物が茂っていた。



写真7 ザオ女性の衣裳

作業時には長衣の裾を絡げて、3月のトウモロコシの種蒔き作業を行う。1月5日から畑の草を刈り、2月にこれを焼き、3月には整地する。



写真8 笕による灌漑

彼らの耕地利用を見ると、水と日光が得られるかどうかの問題となる。日光について考えると、一般的に南斜面、凸型の山肌、つまり山に日光を遮られない土地で耕作がなされている。水について観察してみると、一概に平坦な地が水稲、山地が陸稲という土地利用とは言えず、天水の得られる条件の良い土地では水稲、水が得づらい土地では陸稲やその他の作物が耕作されている。タフィンでは、水田への灌漑用水路を作り、また、天水を確保できない水田には笕で水を供給して、そして、飲料水も人の立ち入らない山から笕を使って取水する。(写真8)

逆に耕作されない土地は、既に長年耕作に使用し、現在は休耕地として疎らに草木が生える雑木林となった場所である。元来、山々を移動して、急な斜面を選んで焼畑農業 *mien minh da coons* を行ってきたザオの人びとは、水田農業より林業や山菜採集を好む。そのために、同じ盆地の中でフモンの人びとが、急な斜面に関わらずほとんどの土地を耕作地として利用するのに対して、山側を好むザオの人びとは、その自然環境に応じた耕作を行い、窪地や谷間などを自然のままに保ち、そこに生えている植物を採取する。これらのうち薬用植物の詳細については後述する。

3-2. タフィン村の居住環境

タフィンや他のザオの集落に共通して見られる「小径」は、他の社会と繋がる道であり、その途上の明るい森林の中に住居を築き、生活を営んでいることを前述した。(写真9)

この様相はタイのザオ社会を調査した白鳥芳郎の報告[白鳥 1978]などにも通じ、筆者が観察した他のザオグループの集落からも、自然環境に対応した「ザオ独自」の集落形成にある原理的なものが見出せる。

まず、ザオが山の中に集落を設定するために選定する立地条件を挙げると、山の斜面が平坦となり、その広がりの方で再び急に落ち込むような山腹上の台地であること、その台地の形は山に沿った棚状あるいは、舌状に張り出した地形が好まれる。次に、台地が単独でなく、浅く水流の少ない川を挟んで、もう一つの同じような台地が隣接する地形があり、これら二面の台地が角度の差こそあれV字状やU字状、あるいは馬蹄状の小さな谷を挟む形となり、この間に本道が作られる。そして、台地の前面または背後に溪流があり、その水流が台地の中間や外辺で川となって流れ落ちている[白鳥 1978:100]。

このような条件が民族集団ザオの集落に共通して見られ、タフィン村のザオ集落の立地条件にも通じる。そして、集落の周囲が小川で囲まれた地形と住居の背面に山の斜面、まるで森林とその谷間を抱え込んだような斜面に住居が建ち、その周辺に耕作地が拓らかれている。



写真9 ザオの住居。
多くは森林を残した山の斜面に家を建てる。

3-3. タフィン村のザオの農耕(地図3)

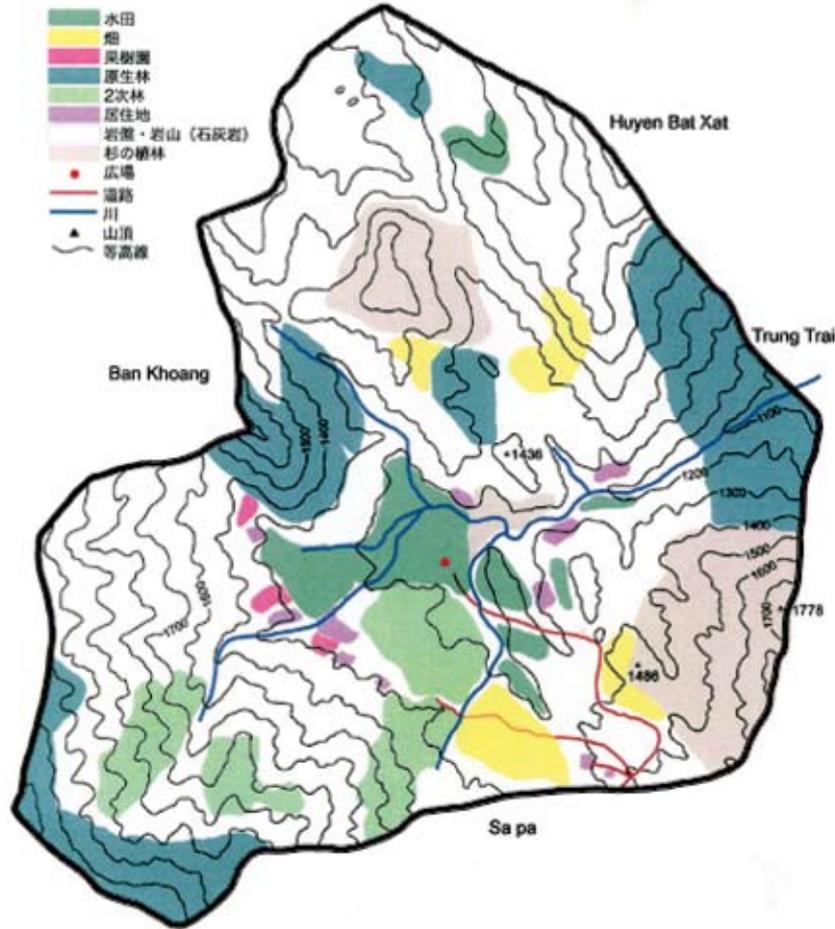
現在でもタフィン・ザオの稲作の多くは、山の斜面を拓いて伝統的に陸稲 *ling uong* を植え、耕地利用の長くなった畑を下部から水田化して水稲 *beo me* や粳米 *via nhieu* を栽培する。そしてサツマイモ *phan doi* やタロイモ *hau chay*、トウモロコシ *me* などを自給用に栽培する。サツマイモは芋だけでなく、葉や茎も食用とする。また、蔬菜類としてはバナナ *lay chai*、蕪 *lay pa peng*、高菜などが一年を通して住居の近くで栽培され、またサトウキビ *cam chia*、ソラマメ *tap*、大豆 *tap ndim*、タバコ *in tau buo*、リュウキュウアイ *gun* (*Baphicanthus cusia*)⁽¹²⁾ などの栽培も行われる。

タフィンのザオの人びとは、生業である焼畑農業を現在では、集落の背後にある森林部で僅かにこれを行っているに過ぎない。

焼畑耕作を始める際には、まず司祭者に候補地の選定を依頼する。場所が決まると1月5日に伐採を開始し、2-3月まで草木を乾燥させて、火入れが行われる。焼き畑を行なった年には3月にアワまたはトウモロコシが植えられ(写真7)、2年目にはトウモロコシが植えられる。3年目に入ると4月に白米 *dia pe* と黒米 *hat chang bua* の2種の陸稲とトウモロコシがセットで植えられる。このような穀物を組み合わせて栽培する理由は、畑の利用可能期間を延ばす工夫である。数年後には水利の便の良い斜面の下部から水田に利用するようになり、天水のみとなる斜面では、そのまま数年間放置されるか、植林される。

さて、タフィン村ではザオとフモンが入植した時代が異なる。通常、北部ベトナムの少数民族間にある慣例では、土地の使用権は最初に開墾の「火入れ」をした者にあり、数年後にこれを放置して他の場所に移動したとしても、その土地は最初に開墾した家族に所有権があるとされてきた。また、少数民族の土地利用の本来のあり方は、山の斜面の利用にあった。そのために、灌漑設備を必要とする平坦な地はあまり利用されてこなかった。

現在、定住化の進んだタフィン村での耕地利用は、モンセン川の周辺の緩やかな斜面に広がるフモンの田畑が印象



地図3 タフィン村の土地利用(1:45,000 作図 井関高平)

的である。しかし、ザオの田畑の多くは、村を貫く道から離れた凹凸のある山中の斜面に拓かれている。そして、それらの畑の周りには二次林や三次林があり、深い谷間には原生林が残されている。そのような森林部の斜面は石灰岩質の土壌から湧き出る清水で湿り、これらの清水でできた小さな流れが至る所にある。

彼らの耕地利用をみると、当然ながら日当たりが利用形態を決定し、一般的に南斜面や凸型の山肌などの山に日光を遮られない土地で耕作がなされている。焼畑と天水による稲作は一概に平坦な地が水稻、山地が陸稲という土地利用とは言えない。

元来、山々を移動して、急な斜面を選んで焼畑農業を行ってきたザオは、伝統的に水稻耕作よりも斜面を利用した陸稲耕作を得意とし、男性は林業や狩猟を行ってきた。タフィン・ザオの水稻耕作は前述したように1962年以降から徐々に始まったに過ぎない。しかし、同じ盆地に住むフモンの人びとの棚田は、石灰岩のみが開墾を妨げている、と表現できる程に緩やかな斜面から急な斜面まで数100段に達するほどに水田化されている。それに対して、ザオの棚田は斜面の下部の20段以下に留められ、また窪地や谷間などを自然の地形のままに保ち、そこに自生する植物を採取する。(写真10) このように両者の間には灌漑などの農耕技術



写真10 タフィン村の棚田の一角

や土地利用方法の違いが見られた。またタフィン村における水田などの耕作面積は、当然のことながらフモンの方が広い。しかし、換金作物や農閑期に藍染、刺繍や竹編み、また筆者の調査の目的の一つとなった「薬草採集」などを行い、現金収入を得る術に長けたザオの方が経済的に豊かであるとされている。

3-4. 野生・半栽培の有用植物の利用

半栽培植物は、家の周辺や山麓で管理する。例えば、



写真11 医食同源。
野菜と薬草を中心としたザオの食卓。
手前左・ドクダミの根、手前左・ササゲと麴入りの粥。

シュロ (*Trachycarpus fortunei*) を植え、棕櫚繩に加工してサバの「市の日」に売りに行く。また、タケノコ *hau in be*、ヤマノイモ *kiem giang* は各戸の山に自生するものを半管理して採取する。そして、蕨 *guns xang*、ワラビ *rau don*、クレソン *lo chan* などの自生植物も食用とする。また、蜂蜜 *muoi* を飼う家庭もある。

第4節 ザオの人びとの薬草利用

4-1. 薬草とザオの食生活

村に居るとザオの日々の食生活の中で、多くの薬草が使用されているのを見る。例えば、彼らの主食は米飯であるが、日々の食事にはこれと平行して年2回(12月28日と5月2日)に仕込んだ麴 *tiu cam* とモチ米で甘酒状の粥 *hou tiu cam* にして常食する。そして、粥に豚肉やタイワンシオジ *bo bo* (*Fraxinus griffithii*) の若葉などの数種の薬草、また産後の女性にはショウガ *suns* を加えて常食とする。(写真11)

また、日常の食事の副食物は茹でた野菜と飯といった野菜であるが、ほとんどの食事時にドクダミ *moa mia* (*hou ttuynia cordata*) の葉や根添えられる。そして米焼酎に薬草を漬け込んだ各種の薬草酒を常備し、飲用または



写真12 薬草の採取
住居に近い野や林から10数種の薬草を集めて薬風呂をたてる。

塗付する。

ザオの人びとの薬草の知識は、一般的には日々の惣菜の中に薬草を加えて食事を作る女性たちが詳しく、また胃痛 *ca xia mun* や痒み *beo*、発熱 *pun ha* など、どの病気 *pun* にどの薬草が利くかも熟知している。特に産後の肥立ちに効くとされる多種の草木を挙げることができる。さらに、この山岳地域に居住する少数民族は、一般的に年間数回の水浴を行うに過ぎない。しかし、ザオの人びとは日々の生活の中で疲労感を覚えると、数10種の薬草を大量採取し、大きな釜で水と共に煎じ、その薬湯を風呂桶に入れて、入浴 *dao xin thous* する。用いられる薬草はヨモギ *la ngoai* (*Artemisia princeps*) やショウブ *xa pau* (*acorus calamus*) など、揉むと芳香のたつ植物が多く、腰湯にした状態で入浴し、桶で薬湯を肩からかける。

これら薬草の多くは、住居の周りや、畑の周辺に残された藪地から採取する。(写真12) このうち日常的に飲食するものの多くは、苦味が強く沈静や消化効果のあるカルカロイド類、抗酸性のあるポリフェノール類、血行や沈静に効果のあるテルペン類が含まれる。

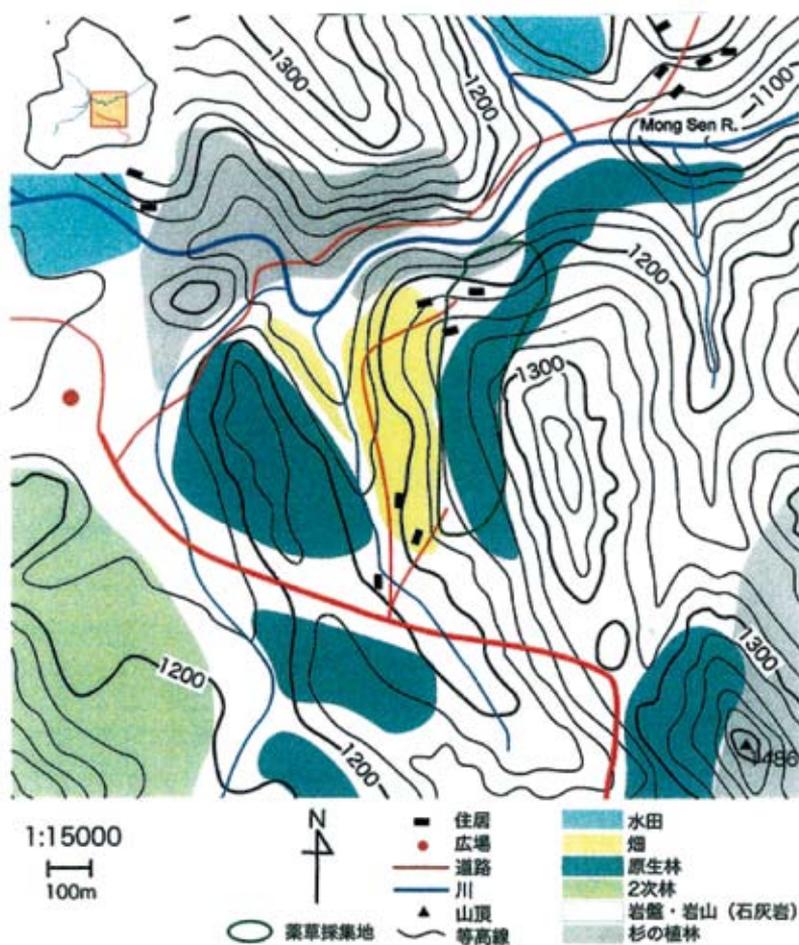
筆者が短期の調査で確認した薬草だけに限っても、その数は100以上を超え、次項4-2.に表示した表3は、それらの一部である。尚、植物の同定は、ハノイ大学教授で国立植物保全研究所員でもある Phan Ke Loc 氏から「サバ郡の植物は雲南省と類似する」という助言に従い、『雲南民間草薬』[雲南省衛生局編1973]を参照した。

4-2. 薬草の伝統医者について

日常に用いる薬草類は女性たちによって採取されるが、病気になった時な

どには政府認定の薬草医 *dia chang* に薬草の採集・処方依頼を依頼する。筆者の調査対象者 Phan Do Ta 氏(1964年生)の両親は近隣に知られた薬草医であり、16歳から父母にその知識を学んだという⁽¹³⁾。

筆者の同行した調査時の Phan 氏の薬草採集地は、住居の後方に広がる彼ら家族に使用権のある山の谷間の森であった。その森は薪や薬草など、一部の植物は利用されているが人の手がほとんど入らない原生林に近い状態で残されていた。ザオ社会ではこのような原生林の中の清水で生育する、新鮮な葉に強い効力があるとされ、Phan 氏は注文の都度、採取しに行くという。(表3、地図4)



地図4 タフィン村の土地利用(1:45,000 作図 井関高平)

しかし、重い症状の患者からの注文には、ファンシパン山など、水が清く標高の高い場所で生育する、黄蓮 *hoang lien* (*Coptis teeta*) などの葉草や、ヤマアラシの胃 *khu tuhua* を採る。また低地で生育するスオウ *song mua* (*Caesalpinia decapetala*) などはラオカイなどの都市の市

で入手してマタビ *mui chin* (*Actindia polygama*) などと調合するなど、その症状に応じた処方をする。

4-3. その他の葉草利用

ザオの人びとの宗教である道教は、その教えの中に「服

	和名	現地名	科名	学名	ザオの効能対象	文献の効能対象	
葉 草	タイワンクズ	kiem chons may	マメ科	<i>Pueraria montana</i>	咳 風邪	発熱 炎症 傷	
	スオウ	song mua	マメ科	<i>Caesalpinia decapetala</i>	下痢 回虫 喘息 鼻水	風邪 咳	
	ハッカ	hamia xai	シソ科	<i>Leucas zeylanica</i>	発熱 痒み	発熱 毒 整腸	
	シキミ属	cu cai deng	シキミ科	<i>Kadsura japonica</i>	風邪	出血 炎症	
	ショウブ属	xinh pau ton	サトイモ科	<i>Acorus xiangyges</i>	風邪	発熱	
	クズ属	tung dieu deng	マメ科	<i>Pueraria</i>	風邪	風邪 発熱	
	ウコン	yen chang	ショウガ科	<i>Curcuma domestica</i>	産後の疲労 整腸	胃腸	
	ブドウ属	pun di nho	ブドウ科	<i>Vitis vinifera</i>	産後の疲労	貧血 咳	
	カキノキ属	dia giang ton	カキノキ科	<i>Diospyros</i>	産後の疲労	貧血	
	ニシキジソ	qui leng lin	シソ科	<i>Coleus atropureus</i>	清血 産後の強壯	清血	
	ウマノスズクサ属	dia gian	ウマノスズクサ科	<i>Aristolochia fengchi</i>	滋養	頭痛	
	ダルマカツラ	Dia vieu	トケイソウ科	<i>Adenia chevalieri</i>	滋養	滋養	
	アカテツ	dia xieu	アカテツ科	<i>Pouteria obovia</i>	強壯	発熱 強壯	
	ウライソウ	po ma mia	イラクサ科	<i>Procris laevigata</i>	痒み	腫れ	
	和名不明	pieng dia bia	ガガイモ科	<i>Cynanchum corymbosum</i>	骨折	毒 貧血	
	カキノキ属	cam chinh	カキノキ科	<i>Diospyros</i>	生理不順	血清 腫止	
	カンアオイ属	phiu hoa	ウマノスズクサ科	<i>Heterotropa</i>	入浴剤	咳 毒	
	トケイソウ属	pieng dia dien	トケイソウ科	<i>Passiflora seemannii</i>	入浴剤	毒 痛み 発熱	
	ヨツシベヤナギ	qua pong	ヤナギ科	<i>Salix tetrasperma</i>	入浴剤		
	タイワンセンダン	tung ze	センダン科	<i>Melia azedarach</i>	骨折 入浴剤	痛み 打撲	
	クチナシ	phu cuei peng	アカネ科	<i>Gardenia jasminoides</i>	整腸	発熱	
	ヨモギ	la ngoai	キク科	<i>Artemisia vulgaris</i>	痒み 水仕事の後	血止 腫瘍	
	ヤエヤマアオキ	giang tons	アカネ科	<i>Morinda citrifolia</i>	胃痛	発熱 強壯 結核	
	ヒメダチゲツトウ	la co gian	ショウガ科	<i>Languas mitica</i>	胃痛	健胃 芳香 食用	
	和名不明	nhai	シダ科	<i>Phymatodes lucida</i>	痒み 虫刺され	出血 腫れ	
	グミ	cu cai deng	グミ科	<i>Elaeagnus bockii</i>	風邪		
	カラムシ	chia gai xiec de	イラクサ科	<i>Boehmeria nivea</i>	痒み 芳香		
	そ の 他	ワセオバナ	xa pau	イネ科	<i>Saccharum arundinaceum</i>	邪視から守る	
		ジュズダマ	a chon	イネ科	<i>coix lachrymal-jobi</i>	呪術用	
		エゾノシシウド属	lai chien ton	セリ科	<i>Coelopleum sextatile</i>	ブタの餌 食用	発熱 静脈
ソメノイモ		kim yandoi	ヤマノイモ科	<i>Dioscorea rhipogonoides</i>	褐色染料		
アメリカヤマゴボウ		duong quy	ヤマゴボウ科	<i>Phytolacca americana</i>	紫色染料		
ベニゾメハグロ		cham xi	キツネノマゴ科	<i>Peristrophe bivalvis</i>	赤色染料	※ご飯の着色剤	
ダンチク		nom giao	イネ科	<i>Arundo donax</i>	黄色染料		
スオウ		song mua	マメ科	<i>Caesalpinia decapetala</i>	赤色染料	※前出	
リュウキュウアイ	gun	キツネノマゴ科	<i>Baphicanthus cusia</i>	青色染料	解毒		

表3 タフィン・ザオの薬用利用

餌」に関する教義があり、当然、日々の食生活の中にも「血を清らかに保つ」といった嗜好性を多く見る。そして、これらの薬用植物はまた、彼らの日常生活の中で呪意を伝えることにも利用される。

例えば、出産を終えた女性は、その3日後に山の田畑へ通じる村外れの場所で、草と藁を焚き *mia con chien*、その「煙」で天界の神々に出産の無事を伝える。また、子供たちを病気へと招く「魔」や「邪視」などから守るために、ジュズダマ *a chan* (*Coix lachrymal-jobi*) や宝貝を子供の帽子に縫い付けたり、病人が出た場合には家の軒先にヨモギなどを吊り、人の出入りを禁じるなどのアニミズム的風習が行われる。さらには、特定のイネ科植物の葉を結び住居の入り口に立てて、忌意を伝えることにも使用される。

第5節 まとめ

ザオの人びとは、「森は私たちのもう一つの畑である」というほどに、森林とともに生活してきた。また数十年前までのサバ県はほとんどの地域が現在のファンシパン山麓附近のような植生の豊かな森林であったという。そこで、定住化政策の行われる以前の植生を観察するために、ファンシパン山に出かけることにした。

筆者の歩いた北西部からの入山路は1988年に大規模な山火事のあった地域に含まれ、2001年の調査時には直径約20cm前後の幹を持った木が再生し、既に地面にはエビネ (*Calanthe sieboldii*) やセンリョウ科 (*Chloranthaceae*)、コケ類などの多種の小草が生育していた。一方、火事に遭った地域内で、標高が2,000m以上の地域では、その標高のために樹木が未だに再生していない状態にあり、植物の種数は他の自然林の森に比べ極端に少ない。また、それらの草本類のうち数種は深い森では観察できない種であり、光の届く場所でのみ生育する生殖サイクルの短い繁殖力に富んだパイオニア植物であった。しかし、火災に遭わなかった森林では、直径2m以上の幹を持つ木も多数ある

原生林となり、その大きく張られた枝によって地面に陽光の差し込まない場所では、コケなどの地衣類が繁茂していた。このようなファンシパン山麓の状況をサバ県に住む少数民族集団によって行われる開墾されたばかりの焼畑に置き換えてみると、伐採して山焼きをした直後の未耕作の養分の残る土地に当たる。

通常、樹木のない熱帯の土地では強い日差しのために、乾燥化が進んでサバナ状となっていく。しかし、サバ県の自然環境となる標高1,500mでの植物の成長は遅いが、表2に示したように降雨と霧によって年平均87%の湿度となり、温暖な気候や多くの有機物を含んだ土壌といった恵まれた条件で、確実に植物が生育する。そして、その回復までに約20年の歳月が必要なことも確認した。

このサバ県の自然環境に熟知するザオやフモンの人びとの伝統的な焼畑農法は、土地を永続的に使用していく手段として、完全に伐採して森を焼くのではなく、地面から約1mの高さに立木を残す。そして、次の年には別の斜面へと移



写真13 ザオの住居用の建材
移動先への運搬が考慮され、刳り貫かれた円柱



写真14 ザオの住居用の建材
移動先への運搬が考慮された板壁

り、10数年をサイクルとして同じ土地に戻り再利用してきた。しかし、1962年の定住化政策により住居周辺の限られた地域内での連作と水田への移行のために、土壌中の有機物が減って収穫量が落ち込み、徐々に耕作地を広げていくのが近年の動向となっている。

しかし、現在でも痩せた畑を放棄することは少なくなく、新しく拓いた田畑の近くへの転居も行われている。その時、新しい住居のために森木を伐るのではなく、これまで使用していた家屋の建築資材が利用される。そのために、丸柱を中空に削り貫き(写真13)、板壁材なども運びやすいように加工されてきた。(写真14)

また彼らの移転先の住居も従来通りに夏を涼しく冬を暖かく過ごすために、森の中に建てられる。このようにザオの人びとは自然を単に資源として開発の対象とするのではなく、自らを自然の一部として共生する。

また、ベトナム国立民族学博物館で薬草研究を行っているVo Thi Thuong 女史によると、ベトナムでは大半の民族集団が草木の根も利用するのに対して、ザオのように葉を中心に薬草を利用する民族集団は珍しいという。これは焼畑をしながら移動してきた彼らの農耕形態や自然観を反映したものと捉えることができると筆者は考える。つまり、根まで利用してしまうと、その植物は絶え再び育つことはないが、

葉の利用であれば再採取がいつでも可能となり、生態系を壊さずに薬草を利用することができる、と思われる。

さて、ザオの人びとの間に堅守されている道教については、専門外のことであり、筆者はこれについて述べることは出来ない。しかしながら、衣服の装飾文様が護符そのものとなって彼らの身体を包み、また日々薬草を飲食して体内にこもる毒素を解毒し血液(血の道)を清浄に保つことや、入浴して身体を清潔に保たねばいけないという、ザオ独特の道教的な考え方は自然観にも大きな影響を与えている、と考えられる。そして、高い土地と清水の在る場所で育つ薬草に優れた薬効性があるとする価値観と野生の薬草植物が育つための湿気や水が必要という実的な面は、水を神聖とする道教的な解釈へと繋がっていると思われる。そしてザオの人びとと同村に居住し、農耕が上手く、田畑の全てを管理しようとするフモンと比べてみても、田畑や住居の立地条件、日々の生活の中に自然環境を受け入れる姿勢がザオには観察することができる。

本稿は植物生態学に興味を覚えている筆者が、タフィン村に居住するザオの植物利用について調査したデータを元に、サバ県の気候を中心とした物理的な環境と、その中に生育する植物、それを利用するヒトとの関係を中心に述べてきた。

今後はこの地方の植物の生態についてさらに深く調べ、物理的な環境と各植物との関係だけではなく、生物間の相互作用などについても視野を広げてゆきたい。また、ヒトと植物の関係においても環境のサイクルにヒトの行為がどのように影響してくるか、といった生態学的な視点から工芸観への理解を深めていきたいと考えている。

謝辞

本研究の実施にあたっては、実に多くの方々にご教示をいただいた。特に、調査にあたってはご助力を得た大阪成蹊大学・内海涼子教授、また筆者の調査同行し共同研究者として資料採集や作図、また本稿をまとめるにあたり、自然環境の観察などを担当し本来であれば共著とすべき野・

高平に感謝いたします。

そして、本研究へのご援助を頂いた塚本学院に対して
深謝する次第です。

参考文献

- Albert Maurice et George Marie Proux
1954『L'ame du riz』Imprimerie D'Extreme Orient, Saigon
- J. Lemoine
1983『Yao Ceremonial Paintings』White Lotus, Bangkok
- Leigh Stubblefield
2001『Sa Pa』The Gioi Publisers, Hanoi Pierre Huard et
Maurice Durand
1954『Connaissance du Viet-Nam』Ecole Francaise D'extreme-
Orient, Hanoi
- 田畑久夫・金丸良子
1995『中国少数民族 雲貴高原のヤオ族』ゆまに書房、東京
- 井関和代
2005『工芸品にみる〈鯉の文化誌〉』『ビオストーリー vol.3』
昭和堂、京都
- 邱年永・張光雄
1983『原色薬用植物図鑑(1)(2)』南天書局有限公司、台北
- 菊池一雅
1988『ベトナムの少数民族』古今書店、東京
- 胡起望・汜宏貴
1978『盤村瑶族』民族出版社、北京
- 白鳥芳郎編
1978『東南アジア山地民族誌-ヤオとその隣接諸種族』講談
社、東京
- 竹村卓二
1981『ヤオ族の歴史と文化 華南・東南アジア山岳民族の社会
学的研究』弘文堂、東京
- 1994『儀礼・民族・境界 華南諸民族「漢化」の諸相』風響
社、東京
- 渡辺清彦
1969『熱帯植物集成』廣川書店、東京

註

- (1) 植民地時代にベトナム主要民族である、京 Kin の人びとの文化について報告した Pierre Huard と Maurice Durand によって著された "Connaissance du Viet-Nam" 等がある。
- (2) 北ベトナムは以前、東京(トンキン)と呼ばれていた。
- (3) かつては、中国への輸出のためにカオリン鉱床が採掘されていたが、現在は採掘されていない。
- (4) 教育と医療も、省により少数民族に対し開かれている。ベトナムの各コミュニティは小学校を持つことになっていて、550ある各県は少なくとも一つの中等学校を持っている。
- (5) 中にはシナ=チベット語系に入れる言語学者もいる。
- (6) 中国では広西壮族自治区を中心に、広東省北部、湖南省南部、貴州省東部、雲南省東部・南部に居住する。
- (7) ザオはさらに Zao Dai Ban, Zao Do (Red Zao), Zao Coc Ngang, Zao Coc Mun (Zao with Horns), Zao Lo Gang, Zao Quan Chet (Zao with tight trousers), Zao Lan Tien (Indigo Zao), Zao Ao Dai (Zao with long dress), Zao Xanh-y (Zao with blue clothers), Zao Son Dau (Zao with waxed-head) の10のサブグループに分けられる。
- (8) 追加調査を行った2004年には観光客をターゲットにした店舗が10数軒増加していた。
- (9) 道教は、自然発生した宗教と人為的な論理宗教の結合体で、中国の南北朝時代に成熟し、唐代に国教となった。その成り立ちから、一般の宗教の特徴だけでなく、独特の民族文化の特色も備えている。
- (10) タフィン・ザオの伝統的な葬儀は土葬 *chuat* で行われ、全て司祭によって取り仕切られる。
- (11) ザオの結婚の儀礼は集落によって異なるが、一般的に親の承認が必要である。伝統的には休閑期に当たる乾期に、若い男女が「歌垣」の場で互いに外面的特徴、牧畜や農業の仕事の能力について歌にして歌い合う。縁談は仲人を通じて少女の家族に持ち込まれ、生まれた時の時刻、日、年などから男女双方の相性が良いとなると、結婚の条件の交渉を始める。花嫁の家族にとって式の前に渡す婚約の品は大変高価であり、暫定的な儀式を公式な結婚の前に行う。婚約から結婚まで時間があるため、中には式が行なわれる際、子供が大きくなっている男女もいる。
- (12) リュウキュウアイは3、4月に作付けを行い、9月に収穫される。これと石灰を用い、秋から冬を中心に藍染が行われる。
- (13) 医療に関しては、ほとんど訓練された医師がいないため、マラリア、赤痢、はしかのような病気はサパの病院に運ばれる。

